

歴代誌第一27-29章「捧げきった人生」

1A イスラエルの司たち 27

1B 月ごとの分団 1-15

2B ダビデの補佐 16-34

2A 神殿事業の指令 28-29

1B 指導において 28

1C 神の選び 1-10

2C 御霊による仕様書 11-21

2B 捧げ物において 29

1C 自発的な捧げ物 1-9

2C お返しできない富 10-19

3C ソロモンの即位 20-30

本文

歴代誌第一 27 章を開いてください。私たちは歴代誌において、ダビデが神殿礼拝に半生の全てを捧げたことを学んでいます。前回の学びで、彼がエルサレムのエブス人オルナンの打ち場こそが、主がいけにえを捧げよと命じておられる、選ばれた場所であることを悟ります。そこで彼は、神殿に使用する資材の調達を加速化させます。ソロモンに、この働きを継続し、必ず神殿建設を完成させることを促します。そして、ソロモンの後の部下になる人々にもそれを言いつけます。

それからダビデは、イスラエルの統治機構を作りました。イスラエルが神殿礼拝を中心に生きるために、初めに行ったのがレビ人と祭司の奉仕の組分けでした。祭司たちは聖所での奉仕を行います。アロンの直系が行います。それからその周囲にある奉仕をレビ人が行います。その他、レビ人は賛美を担当します。モーセの幕屋と異なり、神殿には絶えず神を賛美する歌声や楽器の音が聞こえていました。それから、門衛を配置します。神殿の宝物倉の管理もありました。また、神殿から離れた外事もありました。

1A イスラエルの司たち 27

そして次にダビデは、イスラエルの軍人たちの組織編成を行います。彼らを月ごとに後退して、一年に十二の分団にします。

1B 月ごとの分団 1-15

27:1 イスラエル人、すなわち、一族のかしらたち、千人隊長、百人隊長たち、および彼らのつかさたちは、王に仕えて一年のすべての月を通じ、月ごとの交替制にしたがって、各分団のすべての事に当たったが、その人数は一つの分団が二万四千人であった。

祭司やレビ人と同じように、一般のイスラエル人の軍人たちも等しく王に仕えることのできるように分団を作りました。違いはレビ人と祭司は二十四組であったのに対して、分団は十二です。そして分団の人数はみな等しく、二万四千人です。

27:2 第一の月、第一分団の長、ザブディエルの子ヤショブアム。彼の分団は二万四千人。27:3 彼はペレツの子孫のひとりで、第一の月を受け持つ將軍たちすべてのかしらであった。

ヤショブアムは、歴代誌第一 11 章に出てくる、ダビデの三勇士の一人です。これから出てくる分団長のほとんどが、歴代誌第一 11 章に出てくる勇士たちです。4 節の第二の月の分団長ドダイは、11 章 12 節に出てくる三勇士の一人エルアザルの父になります。こんな感じで、第十にの月の第十二軍団までの頭が 15 節までに書かれています。そして 16 節を読みます。

2B ダビデの補佐 16-34

27:16 なお、イスラエルの各部族の長は、ルベン人では、ジクリの子エリエゼルがつかさ。シメオン人ではマアカの子シェファテヤ。

ここからイスラエル各部族の長が書かれています。軍事関連の長であると考えられますが、これまでの十二分団の長の他に、イスラエルの各部族のかしらもダビデは決めました。興味深いのは 23-24 節です。

27:23 ダビデは二十歳以下の人々は数に入れなかった。主がイスラエルを天の星のようにふやそうと言われたからである。27:24 ツエルヤの子ヨアブが数え始めたが、終わらなかった。このため、御怒りがイスラエルの上を下って、その数はダビデ王の年代記の統計には載らなかった。

ダビデは、過去の過ちを繰り返しませんでした。過去に、イスラエルの人口、特に兵役につくことのできる者たちの人口調査をしたために、神の罰が下りました。それで彼は敢えて、二十歳以下の人々を数に入れませんでした。イスラエルの民は自分の民ではなく、神ご自身の所有の民です。私たちは、これをわきまえないと、自分に任された奉仕を自分のものにしていこうとする誘惑に陥ります。自分がいなくても、神の働きは進んでいくのです。自分がいなくても、神の働きが広がることにむしろ、私たちはその恵みと不思議をほめたたえなければいけません！

そして興味深いのはその理由です。「主がイスラエルを天の星のようにふやそうと言われたからである。」覚えていますか、ヨアブがかつて、「主が、御民を今より百倍も増してくださいませうように。(21:3)」と言いました。主がアブラハムのゆえに大いに祝福されるのだから、それをまるで自分のものであるかのように掌握して、その祝福の流れを止めてはいけないということです。私たちが、主の僕に徹して、決してキリストにある神の祝福の邪魔をしてはいけません。

そしてここでは、ヨアブが失敗を犯しています。彼が二十歳以下の男たちを数えはじめたのです。けれども、主がそれをお怒りになり、ヨアブはその人数を把握するまで数えられませんでした。そして25節から31節までは、ダビデ王宮の個人的な財産のために仕えている者たちの組織編成です。

27:25 王の宝物倉をつかさどったのは、アディエルの子アズマベテ。野と町々と村々とおのおののやぐらにある宝物倉をつかさどったのは、ウジヤの子ヨナタン。

神殿の宝物倉は、主に捧げられたものでありますが、ここでは王自身の財産の宝物倉です。この財産を後にダビデは、主にお捧げしました。

27:26 土地を耕して畑仕事をする者たちをつかさどったのは、ケルブの子エズリ。27:27 ぶどう畑をつかさどったのは、ラマ人シムイ。ぶどう酒の倉にあるぶどう畑の産物をつかさどったのは、シェファム人ザブディ。27:28 低地にあるオリーブの木といちじく桑の木をつかさどったのは、ゲデル人バアル・ハナン。油の倉をつかさどったのはヨアシュ。27:29 シャロンで飼われる牛の群れをつかさどったのは、シャロン人シルタイ。谷にいる牛の群れをつかさどったのは、アデライの子シャファテ。

土地とその作物はすべて、ダビデ私有のものであります。28節の「低地」とはシェフェラのことで、ユダ山地とペリシテ人の住んでいる地中海沿岸の間がシェフェラ地方であります。オリーブの木から、大量の油を取ることができるので、油の倉も整備しました。そして、シャロンとはペリシテ人の住む地中海沿岸より北、カルメル山に至るまでの地中海沿岸地域のことです。そして「谷」というのはおそらく、ヨルダン川沿いのヨルダン溪谷のことではないかと思われます。

27:30 らくだをつかさどったのは、イシュマエル人オビル。雌ろばをつかさどったのは、メロノテ人エフデヤ。27:31 羊の群れをつかさどったのは、ハガル人ヤジズ。これらはみな、ダビデ王の所有する財産の係長であった。

ここに書いてある通り、これはダビデ王の私有財産でした。そして次に、ダビデの側近の名が連ねられています。

27:32 ダビデのおじヨナタンは議官であり、英知の人で、彼は書記でもあった。ハクモニの子エヒエルは王の子らとともにいた。27:33 アヒトフェルは王の議官で、アルキ人フシャイは王の友であった。27:34 アヒトフェルの跡を継いだのは、ベナヤの子エホヤダとエブヤタルであり、王の将軍はヨアブであった。

ここでアヒトフェルの名があり、その跡を継いだ者たちの名もありますが、これはもちろん、アヒトフェルが自殺したからです。ダビデの息子アブシャロムがエルサレムを奪い取った時、アブシャロムの顧問になったのがアヒトフェルでした。

2A 神殿事業の指令 28-29

そして 28 章では、ダビデが非常に年老いてソロモンに王位を移すところに入ります。27 章に書いてあったイスラエルの司たちを集めて、彼らが行わなければいけないことを伝えます。

1B 指導において 28

1C 神の選び 1-10

28:1 さて、ダビデはイスラエルのすべてのつかさ、すなわち、各部族のつかさ、王に仕える各組のつかさ、千人隊の長、百人隊の長、王とその子らが所有している財産、家畜全体の係長たち、宦官たち、勇士たち、つまり、すべての勇士をエルサレムに召集した。28:2 ダビデ王は立ち上がって、こう言った。「私の兄弟たち、私の民よ。私の言うことを聞きなさい。私は主の契約の箱のため、私たちの神の足台のために、安息の家を建てる志を持っていた。私は建築の用意をした。28:3 しかし、神は私に仰せられた。『あなたはわたしの名のために家を建ててはならない。あなたは戦士であって、血を流してきたからである。』

列王記第一 1 章を読むと、ダビデがソロモンに王位を移す時に、非常に年老いていて、基本的に寝床で暮らしていたことが分かります。しかし今は、力をふりしぼって立ち上がっています。かつて、ヤコブの床の周りに十二人の息子を集めて、そして祝福し、終わりの日を預言しましたが、ダビデも今、彼らに残す言葉を伝えました。初めに、彼が神の家のために家を建ててはならない、と神に命じられたことを伝えています。彼ら自身も、「血を流してきた」というダビデの言葉を、身をもって知っていました。ダビデの指揮の下、これら聞いている兵士たちは戦ってきたのですから。

28:4 けれども、イスラエルの神、主は、私の父の全家から私を選び、とこしえにイスラエルを治める王としてくださった。ユダの中から君たる者を選ばれたからである。私の父の家はユダの家に属している。主は私の父の子どもたちのうちで、私を愛し、全イスラエルを治める王としてくださった。28:5 主は私に多くの子どもを授けてくださったが、私のすべての子どもの中から、私の子ソロモンを選び、イスラエルを治める主の王座に着けてくださった。28:6 そして、私にこう仰せられた。『あなたの子ソロモンが、わたしの家とわたしの庭を建てる。わたしが彼をわたしの子として選び、わたしが彼の父となるからだ。28:7 もし彼が今日のようにわたしの命令と定めを行なおうと堅く決心しているなら、わたしは彼の王位をとこしえまでも確立しよう。』

ダビデは「選び」を強調しています。まず、イスラエルにおいてユダから君たる者を選んだ、と言っています。覚えていますが、ヤコブが終わりの日の祝福を宣言した時に、こう預言しました。「王権はユダを離れず、統治者の杖はその足の間を離れることはない。ついにはシロが来て、国々の民は彼に従う。(創世 49:10)」そしてユダ全家の中からさらに、ダビデを選ばれました。ダビデの家族にも彼の他に七人の息子を父エッサイは持っていましたが、その中からダビデを選ばれたのです。そして、ダビデ自身にも多くの息子がいました。その中でも「ソロモン」を神は選ばれたのです。そして、神はソロモンをご自分の子として選ぶ、とまで宣言されています。

ここでダビデは、自分がイスラエルの王として神が選ばれた理由を述べています。4 節に、「私を愛し」とあります。神はダビデが他の息子たちの中で優れているからイスラエルの王とした、とは言っておらず、ダビデを愛しているから選ばれたのです。実はソロモンにも、神の寵愛を意味する別名が与えられていました。サムエル記第二 12 章 24-25 節を読みます。「ダビデは妻バテ・シェバを慰め、彼女のところにはいり、彼女と寝た。彼女が男の子を産んだとき、彼はその名をソロモンと名づけた。主はその子を愛されたので、預言者ナタンを遣わして、主のために、その名をエディデヤと名づけさせた。」そして、主はキリストにあって私たちを愛し、選んでおられます。テサロニケ第二 2 章 13 節にこう書いてあります。「主に愛されている兄弟たち。神は、御霊による聖めと、真理による信仰によって、あなたがたを、初めから救いにお選びになったからです。」主に愛されています。だから主は、あなたを御霊によって聖めを受け、真理を聞いてそれを信じるようにしてくださったのです。そのように、初めから救いに選んでくださいました。

ところでソロモンは、キリストを指し示す存在でした。ダビデに与えられた、彼の世継ぎの子が神の子となり、そしてとこしえにその国を治めるのです。彼はこれを、「はるか先のことまで教えてくださいました。(1歴代 17:17)」と告白しており、自分の王権からメシヤが出てくることを知っていました。そして、ソロモンよりもはるか後に、預言者イザヤはダビデに与ええた約束について、こう預言したのです。「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。(9:6-7)」そして、この預言をガブリエルはマリヤに告げて、イエスがこのキリストであると告知したのです(ルカ 1:31-33)。けれども、ソロモンはそのメシヤを表す存在として、そのメシヤに関する約束の予型とも言うべき働きをするように召されます。

ここで条件があります。彼らはまだ旧約、古い契約の中にいます。「もし彼が今日のようにわたしの命令と定めを行なおうと堅く決心しているなら、わたしは彼の王位をとこしえまでも確立しよう。」ソロモンの主への掟の従順によって、その王位が成り立つこととなります。けれども、不従順であれば呪いがあります。事實は、ソロモンは晩年に神から離れてその呪いがやってきました。

28:8 今、主の集会、全イスラエルの前で、私たちの神が聞いてくださるこの所で、あなたがたは、あなたがたの神、主の命令をことごとく守り、求めなさい。それは、あなたがたがこの良い地を所有し、あなたがたの後、とこしえまでもあなたがたの子たちにゆずりとして与えるためである。

ソロモンに対してだけでなく、イスラエルの司たちも主の命令をことごとく守ることによって、この良い土地を所有して、とこしえに子孫のゆずりの地とすることができると励ましています。

28:9 わが子ソロモンよ。今あなたはあなたの父の神を知りなさい。全き心と喜ばしい心持ちをもって

神に仕えなさい。主はすべての心を探り、すべての思いの向かうところを読み取られるからである。もし、あなたが神を求めらば、神はあなたにご自分を現わされる。もし、あなたが神を離れるなら、神はあなたをとこしえまでも退けられる。28:10 今、心に留めなさい。主は聖所となる宮を建てさせるため、あなたを選ばれた。勇気を出して実行しなさい。」

ソロモンに対する言葉です。22 章ですでにソロモンに対して、神殿建設に取りかかりなさいと鼓舞しましたが、ここでは個人ではなく、公に、他のイスラエルの司たちがいるところで話しています。ここでのダビデの言葉は午前礼拝の時に説き明かしました。けれども、10 節については話しませんでした。ダビデは、「神を知りなさい」「神に仕えなさい」「神を求めなさい」と命じただけでなく、「心に留めなさい」そして「勇気を出して実行しなさい」とも命じています。

心に留めるのは、ソロモンが神に選ばれたことについて心に留めることです。神の働きをする時、そしてキリスト者として成長する時に、自分が神に選ばれていることを知ることは必要不可欠な要素です。「ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたこととを確かなものとしなさい。これらのことを行なっていれば、つまりくことなど決してありません。(2ペテロ 1:10)」自分がキリスト者となり、これからの歩みを主にすべて委ねます。「私の願い、私の計画、私の考えを、主よ、すべてあなたに明け渡します。」と祈ります。それでもなおかつ、行っていて心に平安のあるものの多くが、「これを行いなさい」と神に命じられているからであります。これが神の召しであります。神の召しとは、これこれを行いなさいと神の命じられる事柄です。

この召命観のある時に、私たちは恐れることなく、またあきらめることなく、主のお仕事をする事ができます。パウロは若い牧者テモテにこう言いました。「神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みによるのです。(2テモテ 1:9)」牧者だけでなく、皆さん一人一人を、神は召して下さっています。キリスト者として召されているのですから、キリスト者が実を結ぶように召しておられるのです。だから、その召命観をもって今、与えられている仕事、また教会の奉仕を行ってください。

そしてもう一つの命令、「勇気を出して実行しなさい」は説明の必要がありません。新たな一步を踏み出すことは勇気の要ることです。けれども行うのです。実行あるのみです。

2C 御霊による仕様書 11-21

28:11 ダビデはその子ソロモンに、玄関広間、その神殿、宝物室、屋上の間、内部屋、贖いの間などの仕様書を授けた。28:12 御霊により彼が示されていたすべてのものの仕様書であった。すなわち、主の宮の庭のこと、回りにあるすべての脇部屋のこと、神の宮の宝物倉のこと、聖なるささげ物の宝物倉のこと、28:13 祭司とレビ人の組分けのこと、主の宮の奉仕のすべての仕事のこと、主の宮の奉仕に用いるすべての器具のことである。28:14 金については、各種の奉仕に用いるすべての器具に使う金の目方が、すべての銀の器具については、各種の奉仕に用いるすべての器具の目方

が示され、28:15 金の燭台とその上にある金のともしび皿の目方は、一つ一つの燭台とその上にあるともしび皿の目方が、銀の燭台については、一つ一つの燭台の用途別に燭台とその上にあるともしび皿の目方が示されていた。28:16 また、並べ供えるパンの机、一つ一つの机に使う金の目方、銀の机に使うその銀、28:17 純金の、肉刺し、鉢、びん、金の杯については、それぞれの杯の目方、銀の杯について、それぞれの杯の目方、28:18 精金の香の壇についてはその目方、主の契約の箱の上で翼を伸べ、防ぎ守っているケルビムの車のひな型の金のことが示されていた。28:19 「これらすべては、私に与えられた主の手による書き物にある。彼は、この仕様書のすべての仕事を賢く行なう。」

私たちが列王記第一で読んだ神殿についての詳細な建築構造、またこれから歴代誌第二で見ることになる建築構造などは、みなダビデが用意していたものでした。金銀の目方、また 23 章から 26 章までに書いてあった祭司とレビ人の組分けもダビデが指示を出していました。ダビデは、これが御霊によるもの、そして主の手によるものである、と言っています。出エジプト記におけるモーセが造った幕屋も、主が命じられた通りの型で造りなさいと何度もありましたが、ソロモンの造った神殿も実は、主ご自身の設計であったことが分かります。

28:20 それから、ダビデはその子ソロモンに言った。「強く、雄々しく、事を成し遂げなさい。恐れてはならない。おののいてはならない。神である主、私の神が、あなたとともにおられるのだから…。主は、あなたを見放さず、あなたを見捨てず、主の宮の奉仕のすべての仕事を完成させてくださる。28:21 見なさい。神の宮のあらゆる奉仕のために祭司とレビ人の各組がいる。あらゆる奉仕のために知恵のある、進んで事に当たるすべての人が、どんな仕事にも、あなたとともにいる。つかさたちとすべての民は、あなたのすべての命令に従う。」

ダビデは以前、同じ言葉でソロモンを励ましました。22 章 13 節に、「強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。」とあります。また、11 節には、「主があなたがたとともにおられ」と、同じ言葉で励ましました。かつてモーセがヨシュアをこの言葉で励まし、一度ならず二度以上励ましたように、ダビデも大きな挑戦を受けているソロモンを繰り返して励ましました。

ヨハネによる福音書を見ますと、イエス様が同じことを弟子たちに行われています。これから十字架につけられ、よみがえり、天に昇られてから、弟子たちは目に見える形でイエス様に会うことは、この方が戻ってくるまではありませんでした。そこでヨハネ 13 章の後半から 16 章に至るまで、互いに愛し合うことについて、神の愛にとどまることについて、イエスの名によって祈り、その願いがかなえられることについて、聖霊の助けについて、何度も繰り返して教えられました。私たちの心には、このように励ましが必要です。同じことを聞いていても、また聞かなければいけません。

2B 捧げ物において 29

そしてダビデは、イスラエルの全集団に向かって話します。

1C 自発的な捧げ物 1-9

29:1 次に、ダビデ王は全集団に言った。「わが子ソロモンは、神が選ばれたただひとりの者であるが、まだ若く、力もなく、この仕事は大きい。この城は、人のためでなく、神である主のためだからである。29:2 私は全力を尽くして、私の神の宮のために用意をした。すなわち、金製品のための金、銀製品のための銀、青銅製品のための青銅、鉄製品のための鉄、木製品のための木、しまめのう、色とりどりのモルタルの石の象眼細工、あらゆる宝石、大理石をおびただしく用意した。

ここまでは、以前にも書いてあったことです。ダビデが、戦利品として得た金銀を神の宮のために聖別して捧げました。こうやって、長年かけて用意していました。

29:3 そのうえ、私は、私の神の宮を喜ぶあまり、聖なる宮のために私が用意したすべてのものに加えて、私の宝としていた金銀を、私の神の宮のためにささげた。29:4 家々の壁に着せるため、オフィルの金の中から金三千タラントと、精銀七千タラントを、29:5 金は金製品のため、銀は銀製品のために、またすべて職人の手による仕事のために、ささげた。そこで、きょう、だれか、みずから進んでその手にあふれるほど、主にささげる者はないだろうか。」

先ほど、27章25節以降に、ダビデの私有財産の宝物倉の話がありましたが、ダビデは今度は自分自身のポケットマネーで、これだけ膨大な金銀を主に捧げました。一タラントが34キログラムですから、三千タラントは、なんと102トンです！そして銀はそれに二倍以上です。彼は神の宮を喜ぶあまり、自ら進んで捧げました。そして、他のイスラエル人に同じように、自ら進んで捧げる者がいないか呼びかけています。

29:6 すると、一族の長たち、イスラエル各部族の長たち、千人隊、百人隊の長たち、王の仕事の係長たちは、みずから進んで、29:7 神の宮の奉仕のために、金五千タラント一万ダリク、銀一万タラント、青銅一万八千タラント、鉄十万タラントをささげた。29:8 宝石を持っている者は、これを主の宮の宝物倉にささげ、ゲルシオン人エヒエルの手へ託した。29:9 こうして、民は自分たちのみずから進んでささげた物について喜んだ。彼らは全き心を持ち、みずから進んで主にささげたからである。ダビデ王もまた、大いに喜んだ。

27章に書かれていた、分団の長たち、イスラエル各部族の長たち、またその他の兵士たちや、王の庶務を担当していた者たちが、強いられてではなく、喜んで、自ら進んで、これだけたくさんの金銀を、また宝石を捧げました。覚えていますか、ソロモンに対してダビデは、主に仕える時は、全き心で、また喜ばしい心持ちで仕えなさいと教えましたが、イスラエルの民が今、全き心で、そして自ら進んで行ったのです。

モーセの幕屋の時も同じだったことを思い出してください。ちょっと読んでみましょう。出エジプト記36章2-7節です。「モーセは、ベツアルエルとオホリアブ、および、主が知恵を授けられた、心に知恵

のある者すべて、すなわち感動して、進み出てその仕事をしたいと思う者すべてを、呼び寄せた。彼らは、聖所の奉仕の仕事をするためにイスラエル人が持って来たすべての奉納物をモーセから受け取った。しかしイスラエル人は、なおも朝ごとに、進んでささげるささげ物を彼のところに持って来た。そこで、聖所のすべての仕事をしていた、知恵のある者はみな、それぞれ自分たちがしていた仕事から離れてやって来て、モーセに告げて言った。「民は幾たびも、持って来ています。主がせよと命じられた仕事のために、あり余る奉仕です。」それでモーセは命じて、宿営中にふれさせて言った。「男も女も、もはや聖所の奉納物のための仕事をしないように。」こうして、民は持って来ることをやめた。手持ちの材料は、すべての仕事をするのに十分であり、あり余るほどであった。」何度も、「進んでささげるささげ物」と強調されています。

ここから、私たち神の民が捧げる物が、自ら進んで捧げるものであり、また喜んで捧げる物であることが分かると思います。新約聖書で、教会においても同じ態度で捧げることが命じられています。コリント第二九章5-7節です。「そこで私は、兄弟たちに勧めて、先にそちらに行かせ、前に約束したあなたがたの贈り物を前もって用意していただくことが必要だと思いました。どうか、この献金を、惜しみながらするのではなく、好意に満ちた贈り物として用意しておいてください。私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいませ。(1コリント9:5-7)」

ここで大切なのは、二つのことです。一つは惜しみながら捧げてはならない、ということです。自分が主に対して捧げたのだから、その財産は主のものである、自分のものではない、ということです。自分が献金したのだから、自分の意見を教会で反映してほしいという思い、自分が捧げたのだから、という条件を後で付けるような、ひも付きの捧げものはいけない、ということです。

もう一つは、強いられて、あるいはいやいやながら捧げてはならない、ということです。心理的な圧力がかけられて、献金してはいけないということです。パウロがここで強調しているのは、「前もって用意する」「心で決めたとおりにする」ということです。そしてそれが、「喜んで与える」ことにつながります。コリント人への手紙第一では、パウロはもっと具体的に献金についての指示を出しています。「私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおのおの、いつも週の初めの日に、収入に応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい。(1コリント16:2)」献金袋が回ってくる時に財布を出してそこから献金をするのではなく、収入がある時にすでにそこで捧げる額を決めて、それで実際に献金する時にその額を捧げなさい、と指示しています。

献金に限らず、すべてのキリスト者の奉仕について言えますが、「命令」は「強制」ではないということです。献金は主の命令です。私たちは自分の収入に対して、十分の一を目安にして捧げることが命じられています。(マタイ23章23節、「ただし、他のほう(十分の一)もおろそかにしてはいけません。)」教会として兄弟姉妹が集うことも、神の命令です。バプテスマも神の命令ですし、讚美すること

も命令です。御言葉を聞くことも命令です。キリストの証しを立てることも、伝道も神の命令です。しかし、「これらすべては、自分がまったく神のしもべであり、自分の人生と命はすべて主に委ねられており、それゆえ誰に言われなくても、**私**が主の命令に従います」という、強い、自分の自由な意思が含まれているのです。

そして、自ら主の命令に従う決断をした時に、私たちは喜んで主に従うことができます。喜びというのは、厳密には感情ではありません。もちろん、主に従った結果、感情として喜びを抱くでしょう。けれども、どんなに困難があっても、それでも私は主をほめたたえ、主に従いますと決断しているところに喜びがあるのです。

私たちがキリスト者の自由という時に、それが神の命令に従ってもいいし、従わなくてもよい、というような、自分の好き嫌いで選択できるものでは決してありません。命令は命令なのです、選択肢はありません、それは行うものなのです。けれども、私たちに与らえている自由は、その命令を喜んで行うことのできるという特権です。キリストが私のためにすべてを捧げてくださった。だから、私は、自分の命もすべて、キリストのものとしてされている。この方が命じられることは、他の誰が何といおうと、私は行いたいのだ。」という決断です。キリストの示された愛の応答としての命令遵守であります。

2C お返しできない富 10-19

次に、歴代誌第一のクライマックスになっている、ダビデの讚美と祈りが書かれています。

29:10 ダビデは全集団の目の前で主をほめたたえた。ダビデは言った。「私たちの父イスラエルの神、主よ。あなたはとこしえからとこしえまでほむべきかな。29:11 主よ。偉大さと力と栄えと栄光と尊厳とはあなたのものです。天にあるもの地にあるものはみなそうです。主よ。王国もあなたのものです。あなたはすべてのものの上に、かしらとしてあがむべき方です。29:12 富と誉れは御前から出ます。あなたはすべてのものの支配者であられ、御手には勢いと力があり、あなたの御手によって、すべてが偉大にされ、力づけられるのです。29:13 今、私たちの神、私たちはあなたに感謝し、あなたの栄えに満ちた御名をほめたたえます。

ダビデは、神が富と誉れの源であることをほめたたえています。神は天地を創造された方として、すべての力と尊厳と栄誉と栄光を持っておられます。またすべてを支配する王として、富と誉れの動きはすべて神が掌握されています。

29:14 まことに、私は何者なのでしょう。私の民は何者なのでしょう。このようにみずから進んでささげる力を保っていたとしても。すべてはあなたから出たのであり、私たちは、御手から出たものをあなたにささげにすぎません。29:15 私たちは、すべての父祖たちのように、あなたの前では異国人であり、居留している者です。地上での私たちの日々は影のようなもので、望みもありません。29:16 私たちの神、主よ。あなたの聖なる御名のために家をお建てしようと私たちが用意をしたこれらすべて

てのおびたしいものは、あなたの御手から出たものであり、すべてはあなたのものです。

ここに、キリスト者の献身や奉仕について、なぜ自分が捧げられないのか、その原因を探ることができます。それは、「自分が所有しているものは何もない」という意識がないからです。ダビデは言いました。「すべてはあなたから出たのであり、私たちは、御手から出たものをあなたにささげたにすぎません。」献金をするのを惜しんでいたコリントの教会ですが、彼らは決して貧しい兄弟たちではありませんでした。むしろお金持ちの人が多かったのです。なぜ捧げられなかったのか？「あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。(1コリント 4:7)」自分の持っているものを所有している、という意識が強かったのです。実は自分の持っている物は一つなく、もっぱら主によって授けられているのです。

ヨブは、「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。(1:21)」と告白しましたが、私は何も持っておらず、すべてが神に頼っているのです。ダビデはこれを、「私たちは寄留者で、私たちの日々は影のよう、望みもない。」と言っています。このような「何もないのだ」という意識が薄いために、自分が得た、自分が働いたという意識が強く働いています。それで、「捧げなさい」という命令を神から受けた時に、「取られる」と感じ、窮屈に感じるのです。その人にとって人生は軽くありません。これまで自分が努力して貯めてきた富であり、また自分の経験であるのに、それを簡単に手放すことはできない、と感じるのです。そして自分の生活と人生を重くしている、窮屈にしているのです。

この時に忘れられているのは、神の偉大さです。ダビデが初めに、神の偉大さをほめたたえました。私たちがしばしば忘れるのは、キリストがいかに優れた方なのか、ということです。この万物の支配者であられ、相続者であられます。あらゆる名よりもすぐれた名を神から与えられている方です。そして今与えられているものはみな主から与えられているものだから、捧げるとしても、別に自分の所有物を神に引き渡すことではない、という意識があるかどうか、であります。これは財産に限らず、自分に与えられている時間、エネルギー、能力、その他あらゆるものに言えます。ある人がこう言いました。「私たちがどれだけ神に捧げられるか？を問うのではなく、自分がどれだけ自分のために神の財産を費やしてしまっているのか？を問わなければいけない。」詩篇の著者が言いました。「主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか。(116:12)」何もお返しできません。だって、もともと主のものを動かしているにすぎないからです。

29:17 私の神。あなたは心をためされる方で、直ぐなことを愛されるのを私は知っています。私は直ぐな心で、これらすべてをみずから進んでささげました。今、ここにいるあなたの民が、みずから進んであなたにささげるのを、私は喜びのうちに見ました。29:18 私たちの父祖アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。御民のその心に計る思いをとこしえにお守りください。彼らの心をしっかりとあなたに向けさせてください。29:19 わが子ソロモンに、全き心を与えて、あなたの命令とさとしと定めを守らせ、すべてを行なわせて、私が用意した城を建てさせてください。」

私たちはなぜ、主に捧げるのか？大事なのは、主は私たちの支援を一切必要とされる方ではないことです。先ほど読んだように、いっさいの富と誉れを主は持つておられ、何ら不自由はしていないのです。私たちが捧げるのは、神が必要としているのではなく、むしろ私たち自身が必要だからです。ダビデは「直ぐな心」とこれと呼びました。そして、イスラエルの民がいつも、主ご自身に向けているようにと祈っています。またソロモンが、全き心でいるようにと祈っています。

私たちが主に捧げることによって、私たち自身の内に霊的な祝福が与えられます。自分の心が神の御心と一つになるよう正されます。パウロもピリピ人に対してこう話しました。「ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおりに、私が福音を宣べ伝え始めたころ、マケドニヤを離れて行ったときには、私の働きのために、物をやり取りしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは一度ならず二度までも物を送って、私の乏しさを補ってくれました。私は贈り物を求めているではありません。私のほしいのは、あなたがたの収支を償わせて余りある霊的祝福なのです。(4:15-17)」このように、主に対する愛の表明であり、また兄弟姉妹に対する愛の表明なのです。

3C ソロモンの即位 20-30

29:20 そして、ダビデは全集団に向かって、「あなたがたの神、主をほめたたえなさい。」と言った。すると全集団は、父祖の神、主をほめたたえ、ひざまずいて、主と王とを礼拝した。

ダビデは自分が神を賛美した後に、今度はイスラエルの民が神を賛美する機会を与えました。

29:21 その日の翌日、彼らは主にいけにえをささげ、全焼のいけにえをささげた。雄牛千頭、雄羊千頭、子羊千頭、これらに添える注ぎのぶどう酒、それに全イスラエルのためのおびたしいいけにえをささげた。29:22 彼らはその日、大いに喜んで、主の前に食べたり飲んだりし、あらためてダビデの子ソロモンを王とし、油をそそいで、主のために、君主とし、ツァドクを祭司とした。

ソロモンを改めて王としました。初めにソロモンを王とした時は、ダビデの息子アドニヤが自分が王になると画策して、将軍ヨアブと祭司エブヤタルを自分につけた時に、ダビデがナタンからその動きを知って、すみやかにソロモンを王にする即位式を行なわせたのが初めてです(1列王 1 章)。けれどもダビデの思いには、このような神殿建設に関する情熱がありました。そこで、ソロモンに神殿建設の事業を命じて、それで改めて彼を即位させたのです。

そして民が大いに神を喜んでいます。いけにえを大量にささげ、飲んだり食べたりして喜んでいきます。これは終末的幻を見せています。主イエス・キリストが地上に再臨されて、王として即位されてから、地上では大いなる祝宴が設けられます。「あなたがたに言いますが、たくさんの人が東からも西からも来て、天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓に着きます。(マタイ 8:11)」

29:23 こうしてソロモンは、主の設けられた王座に着き、父ダビデに代わり、王となって、栄えた。全イスラエルは彼に聞き従った。29:24 すべてのつかさたち、勇士たち、および、ダビデ王のすべての子たちまでも、ソロモン王に服した。29:25 主はソロモンを全イスラエルの目の前に非常に大いなる者とし、彼より先にイスラエルを治めたどの王にも見られなかった王の尊厳を、彼に与えられた。

ちょうどこれは、モーセの死後、ヨシュアに対してイスラエルがみな彼に従って、忠誠を誓ったのと同じであります。ダビデが死んだ後も、主が彼に与えられた尊厳がソロモンに受け継がれています。モーセも、またダビデも、ただ自分自身が主に用いらただけでなく、確かに後継者に主の働きを任せることができました。二人とも、自分がしている働きが主の働きの全てだと思っていませんでした。主は自分を越えて働かれることを知っていました。ゆえに、次の人を育てたのです。

私たちに、この意識があるでしょうか？自分が今生きていることが、主の大きなご計画の一部にしか過ぎないことを知っているでしょうか？もしご計画の一部であれば、その働きは続きます。したがって、自分の受けたものを他者に渡していく必要があるのです。自分だけが LCF に集っているのではなく、LCF で働かれる主の御霊は他の人々も受けていかなければいけないものなのです。

29:26 このようにして、エッサイの子ダビデは全イスラエルを治めた。29:27 彼がイスラエルの王であった期間は四十年であった。ヘブロンで七年治め、エルサレムで三十三年治めた。29:28 彼は長寿に恵まれ、齢も富も誉れも満ち満ちて死んだ。彼の子ソロモンが代わって王となった。29:29 ダビデ王の業績は、最初から最後まで、予見者サムエルの言行録、預言者ナタンの言行録、先見者ガドの言行録にまさしくしるされている。29:30 それには、彼のすべての統治、彼の力、また、彼およびイスラエル、それに各地の諸王国が過ごした時代についてしるされている。

ちょうど申命記がモーセの偉業、神がモーセをいかに用いられたかで終わっていますが、同じようにしてダビデの生涯も終わっています。そして彼の偉業について、他の書物も言及していますが、「サムエルの言行録はサムエル記第一、そして預言者ナタン、先見者ガドの言行録とは、もしかしたらサムエル記第二かもしれません。サムエルの死後はもちろん、他の人が書いていますから、第二は確実に他の人が書き記しています。

いかがでしょうか、歴代誌は私たちに神殿を教えます。今は、私たちが神の家で、御霊が住まわれるところです。私たちが、自分自身を神に生ける供え物として捧げているかどうか、であります。